

子どもの人権 ～チャイルドラインMIEから見える子どもの姿～

田部 眞樹子 さん（三重県子どもNPOサポートセンター）

人権保育専門講座5は、三重県子どもNPOサポートセンター理事長の田部眞樹子さんに、「子どもの人権～チャイルドラインMIEから見える子どもの姿～」をテーマに、伊勢・四日市・伊賀の3会場でご講演いただき、92名の方にご参加いただきました。

田部さんには、ご自身の経験や「子どもの人権」を守る活動をされるなかで感じてきたことなどを交えて、「子どもを権利の主体としてみる」保育や子育ての大切さを話していただきました。日常の保育のなかで、子どもをみつめる視点をふり返る時間となりました。



《子どもたちの現状 ～チャイルドラインをとおして～》

チャイルドラインは、「指示しない」「指導しない」「傾聴する」をコンセプトにしています。子どもの主体性を大切にしたい18歳までの子ども専用電話です。チャイルドラインでは、「傾聴」することを大切にします。人間にとって、愚痴を言うことはとても大事です。愚痴を言って心が軽くなると、次のことを考えていこうという余裕ができてきます。これをエンパワメント（内なる力）と言います。傾聴する目的は、子どもたちのエンパワメントなのです。チャイルドラインは、世界中にある子ども専用電話なのですが、それぞれにちがいがあります。日本は、イギリス型です。

同時に実施しているのが、三重県が子ども条例制定に伴い開設した「こどもほっとダイヤル」という県内の子どもだけを対象にしたチャイルドヘルプラインです。チャイルドラインMIEネットワークが受託して現場を担っています。47都道府県中、三重県だけにある誇れるラインです。ここでは、希望すれば子どもを特定することができます。あくまで子どもが希望すればです。子どもが決定する主体者になることを大事にして、子どもが判断するための情報を提供していきます。

子どもの現状（講座資料より）

- | | |
|----------------------|------------------|
| ・3人に1人の子どもが孤独を感じている | ※ユニセフ調査2007年 |
| ・3日に1人の子どもが虐待死している | ※厚生労働省調査2006年 |
| ・10人に8人の高校生が疲れを感じている | ※日本青少年研修所調査2008年 |
| ・毎日1.4人の子どもが自殺している | ※警察庁統計資料2007年 |

これは、古い資料で、今はこれ以上です。チャイルドラインの1年間のまとめをするなかで、今年

はいじめも多かったし、友だちの問題も多かったです。「友だちができない・つukれない」など、友だちがいなければダメという、ある意味での強迫観念みたいなものに縛られている子どもたちが多いです。今の子どもたちは遊ぶ経験が少ないので、一度関係がこじれてしまうとなかなか修復ができません。そして、そのことを人に相談できません。相談することは、自己を肯定することと関係があります。そもそも人に相談するには、「自分はわからない」ということを自分がOKしているのが



前提ですが、チャイルドラインに電話をしてくる子どもたちは、できない自分を人に見せたくないなので、相談することができないのです。他人に相談することができない人は、自己肯定感が低い場合が多いです。でも、人間は一人では何もできません。人間は一人では生きられないから集団をつくって、そこに帰属するのです。私の組織もそうです。一人ひとり、点でしかありません。たくさんの点を集めると面になります。一人ひとりいろんなちがいがあって、ちがいが集まって面になることで、可能性が生まれるのです。そういう実感がないために、自分一人では何かを

やろうとして、結果としてできない。失敗も許されない。出来る出来ないの世界で生きているので、増々できない自分をOKできなくなっていくのだと感じています。昔の子どもたちは、遊びがあったので友だちが自然にできました。ところが今は、遊びが成立しないので、友だちをつくる機会が少なくなっています。こじれた人間関係を修復する力も弱くなっています。私たちは、チャイルドラインをとおして、子どもたちがこのような現状になっている背景をつかむことを続けています。



《いい子があぶない！》

子どもたちは、おとなに望まれている姿になろうとしています。望まれている姿とは、「いい子」です。「いい子」として育ってきた人は、そのことに気づいたときに相当苦しみます。「いい子」は、「自我を放棄した子」です。人間には必ず、「自分はこうしたい」という思いがあります。誰かの意向に沿って生きるためには、それを放棄しなければなりません。「いい子」は、ほめられ、評価されようと、誰かの意向に沿って生きているうちに、自分自身を見失っていきます。

親が支配しやすい子、コントロールしやすい子が「いい子」と見られます。親の願いを押しつけられ、条件付きの愛で育てられている存在とも言えます。親が満足するために子どもを評価しているうちに、子どもたちはどうすればこの場所で生きていけるかを感じ取り、親の意向に沿って生きていこうとします。その結果、子どもが自分自身を見失うことにつながり、自分の主体が確立し



ません。主体とは、「私が私であること」「私が自分の人生のなかで、何を実現していくのかを決めていくこと」です。自分が親の評価を気にしながら、親の意向に沿って育ってきたことに気づいた人は、本当に苦しい思いをします。苦しんでいる子を見ても、親は理解できません。「だってあの子、『いい子』だったもの」となってしまうのです。どうして手がかからない子だったのかを考えると、手がかからないようにすることで親からの愛情を求めていたからです。親に認めてもらいたいから、親の意向に沿おうと一生懸命に生きていることに親は気づいていません。私が子どもをもつ親になってつくづく感じたのは、「何かをしてあげる」ことではなく、「愛してあげる」ことの大切さでした。愛とは、相手の存在そのものをOKしてあげることです。愛され続けることで、自己肯定感は得られるのです。



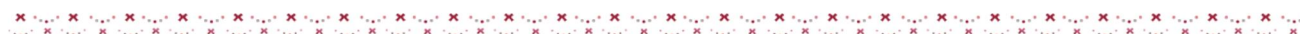
《自己肯定について》

現時点で自己肯定できていない場合はどうしたらいいのかという、その子の存在そのものを認めてあげることしかならないと思います。自己肯定の基本は、他者から自分の存在を認められること、そして、自分が自分の存在を認めることの両方です。子どもたちがそうなるためには、達成感の積み上げが必要です。達成感を得るためには、まず失敗の体験が



必要です。そして、失敗を次の成功につなげていくためには、おとなのサポートが必要です。決して叱るのではなく、子どもが「どうして失敗したんだろう」と自分を見ていくことを手助けしてあげるサポートです。失敗する、次に向けて自分を見る、この繰り返しのなかで達成感を得ていくことで、子どもたちは自分に自信を得ていくことができます。そして、「失敗しても自分は大丈夫なんだ」と実感していきます。

また、自己否定しないことも重要です。親に評価されるなかで育ってきた子どもは、おとなになっても他者からの評価を気にします。他者から評価されたことが自分の評価になるのです。そうではなくて、自分で自分を評価し、できなかったことがあったとしても、「それに気づけた自分は素晴らしい」と評価できればよいのです。人間はできないことがあって当たり前で、できない自分を受け入れ、これから何かができるように生きていけばいいのです。そうしたことを自分のなかで納得できることが重要なのだと思います。「できない」自分を否定しているうちは、自分を肯定することはできません。



《子どもを権利の主体として見る》

子育ては、一人の人間の将来に責任を負っている非常に重要な仕事です。子育てのなかで、子どもにどのようにかかわるかによって、その子どもの成長は大きく異なっていきます。子育てなくして、子育てはありません。だからこそ、子育てのなかで、子どもの人権を保障することは重要な



です。それは、子どもたちが学習権をもっているからです。そして、子どもたちが学べる環境を用意し、学習権を保障するのはおとなや社会の義務です。子どもの権利条約のなかには、「子どもの最善の利益」がうたわれています。子どもの主体性は、おとなのサポートのなかで、自分で考えて行動し、失敗もしながら成長していくなかで確立していくものです。チャイルドラインに電話をしてくる子どもたちのなかには、自分で考えて行動してきた経験が全くない子どももいます。「どうしたいの？」と聞かれた経験がないそうです。ある子は、いじめにかかわっておとなに相談しました。ですが、おとなが勝手に判断して解決しようとしたことに不満をもち、チャイルドラインに電話してきました。その子は、「『あなたはどうしたいの？』と聞いてもらえない」と言っていました。また、「同じ結果になったとしても、『自分がこうしたい』と思ってやったことなら、自分で責任をもてる」「でも、私の意思ではないことをおとなが判断してやるのは嫌だ」とも言っていました。おとなのサポートというのは、子どもが「こうしたい」と判断したことを、おとなの立場で見たとき、たとえ間違っていると思っても、挑戦のチャンスを保障することだと思います。自分で判断し行動していくことは、自分の行動に責任をもつことにつながります。チャイルドラインが、傾聴に徹するのも、子どもたちが自分の置かれている状況を誰かのせいにして、考えるのをやめてしまわないようにするためです。おとなの責任は非常に大きいのです。



《子育て(子どもの成長過程に見合った適切な支援・サポート)》

子どもには自分の意思があります。生まれて数カ月の子どもであってもそうです。私が娘の子育てをするにあたって、最初に苦戦したのが離乳食を食べさせることでした。早く食べさせて、他の家事がしたいので無理やり食べさせようとしたのですが、娘は食べてくれません。スプーンを投げたりして、はっきりと「イヤ」という意思を示してくるのです。私は、自分の子育てが試されていると感じました。考えた末、床に新聞紙を敷くことにしました。それも、スプーンを投げても大丈夫なぐらい広く敷きました。そして、娘がやることに合わせながら、じっと待ちました。2日間かかって、娘はやっと離乳食を自分で食べました。非常に難しいことですが、子育ては待つしかないし、自分の思い通りにすることをあきらめるしかないのです。3歳ぐらいになると、「イヤイヤ」が始まります。この頃、子どもは親を自分とちがう人格であると認識していきます。「イヤイヤ」は子どもの意思ですから、それを受けとめていくプロセスが大切です。子どもの意思をきちんと受けとめていくことが、子どもの人権を守ることなのです。ただ、わがままを許すことと、子どもの人権を守ることはちがうということを忘れないでください。



「わがまま」は、成長過程のなかで必要なことではありません。その子の勝手な要求です。子どもの意思を尊重することは、成長過程で保障しなければならないことです。しかし、わがままを許すことが子どもの人権を守ることだと勘違いしている保護者の方がいます。保育士のみなさんは、そのち

「わがまま」は、成長過程のなかで必要なことではありません。その子の勝手な要求です。子どもの意思を尊重することは、成長過程で保障しなければならないことです。しかし、わがままを許すことが子どもの人権を守ることだと勘違いしている保護者の方がいます。保育士のみなさんは、そのち

がいを意識して保護者の方々にかかわる必要があると思います。

「甘えさせる」ことと、「甘やかす」ことのちがいにも注目しておく必要があります。「甘やかす」ことは、わがままを許すことと同じです。「甘え」は、子どもが成長していくうえで、必要なことです。自分の周りで、自分の存在をOKしてくれる人がいることは、子どもの愛着形成にとって非常に重要です。



《一人で子育てはできない》

私は、東京から誰も知り合いのいない三重に引っ越して、子育てをしました。夫は、子育てに参加しない人でしたから、一人での子育てでした。一人で子育てをしていると、イライラしてノイローゼ気味になってしまいます。私は、子育てをとおして、人間は一人では生きていけないことを学びました。私が子育てに追い詰められたときにやったことは、人に頼ることでした。家の裏のアパートに、オムツが干してある部屋がありました。インターホンを鳴らすと、家の人が出てきてくれたのです。私は、「一緒に子育てしてください」とお願いしました。突然で、きっとわけがわからなかったと思いますが、その人は「いいよ」と言ってくれました。その人と関係ができると、その人の周りの人ともつながることができ、一緒に子育てをする仲間ができていきました。どれだけがんばっても、一人で子育てはできません。悩みを聞いてもらえるだけで、子育ての力になるのです。このようにして、たくさんの人々の力を借りながら三重で子育てができました。その恩返しをするために、私は三重で子どもの権利についての活動を続けています。子どもたちは、養育されるために生まれてきていると思います。しかし、養育を受けられない子どもたちもいます。そのような子どもたちは、社会全体の支えが必要です。すべての子どもが、「生まれてきてよかったんだ」「ここにいていいんだ」と思える三重県にすることが私の夢です。保育士の仕事も、同じですよ。



《子どもの人生は子どものもの》

子どもは、発達段階にあるので、当然保護される権利があります。子どもを保護することは、余計なお世話(過保護)をすることではありません。しかし、おとなが子どもができることにまで口を出したり、手を出したりしている場合があります。日常のちょっとしたかかわり方で、子どもの主体が奪われることにつながります。おとなは、自分が正しいと思い込みやすいので、自分がおごってしまっていないかを点検し続ける必要があります。もちろん、そうなってしまっている自分を否定する必要はありません。気づくことができればOKです。

子どもは十分に力をもっているので、「私がこの子のどこにサポートをしてあげれば、最大限の力を引き出せるのだろう」という考え方でかかわるのが大切だと思っています。

北イタリアのレッジョエミアというところにある保育園へ視察に行ったときのことで。2歳児や3歳児が、朝登園してくると、「今日、私はO Oがしたい」と言って、自分でやることを決めるの



です。例えば、「こんなものを作る」とか「こんなことに挑戦したい」ということを自分で決めていきます。そうした子どもがやりたいことを創りあげるために必要なもの（例えば、ボタン、布、木、針金、葉っぱなど）が、園の中にはたくさん置いてあります。だいたい3人から4人に一人、おとながついていますが、子どもに何かを指示するということはありません。おとなは、子どもに聞かれたら、一緒に考えるという立場でかかわっています。話し合いも行われていて、子どもたちが「自分はどうかだったか」ということについて振り返っていました。2歳児や3歳児でも、それができていたのです。毎日の積み上げが、可能にしているのだと思います。

知識をいくらもっていても、知恵として使えなければ意味がありません。レジヨエミアでは、子どもたちが、知識を「生きる知恵」とできるような教育をすすめているのです。私たちも、子どもにかかわるうえで、大切にしたいことです。知識を「生きる知恵」にするためには、支配のなかで「させる」のではなく、失敗してもいいから「自分で何かに挑戦する」「自分のやったことに責任をもつ」経験を積み上げていくことが重要です。そのことは、子どもたちが、将来意欲的に生きていくことにもつながっていきます。



《乳児期の愛着形成》

人間の赤ちゃんは、人間らしさを司る脳の前頭前野が未発達なまま生まれてきます。前頭前野は、生まれてからつくられていきます。前頭前野を形作っていくのは、自分の存在を認められる経験です。例えば、赤ちゃんが泣いた時、誰かが赤ちゃんのところに来てくれるという経験の繰り返しです。また、抱っこされることで、ぬくもりを感じることもそうです。こうした経験が日常的に繰り返され、潜在意識のなかに残っていくことで、愛着は形成されていきます。「おなかがすいている」「暑い」「寒い」「おむつを替えてほしい」といった不快な状態から、快適な状態に保護してくれる存在が自分の身の回りにいると実感できることが、「自分はここにいていいんだ」という感覚を得ることにつながっていくのです。



次の段階は、自立への第一歩です。よちよち歩きができるようになると、親が抱っこしていても降りたがります。でも、歩いて障害物に当たったりすると、親のところに戻ってきて抱きつきます。これは、自立の練習をしているのです。自立の芽が出てくると、子どもは自分が保護されていることを窮屈に感じています。にもかかわらず、子どもが抱っこから降りたいという素振りを見せたとき、親がスッと離してあげないと「離れてはいけないんだ」ということを感覚的に学んでしまいます。この時期は、自分

勝手に親と離れ、自分勝手に戻って来て甘えるということを繰り返しながら、自立の練習をします。十分に甘えさせてあげることで、子どもは「この人は、自分の成長に必要な保護をしてくれる」と感覚的にとらえていきます。3歳ぐらいまでは、親と一体となって成長していくのです。こうした愛着形成を土台に、子どもたちは自己肯定感を得ていきます。愛着形成が不完全な場合、愛着を取り戻すことはできますが、そのためには倍の時間がかかると言われています。乳児期の愛着形成がどれだけ重要かがわかりますね。



参加者の感想

- 子どもたちにとって自己肯定感はとても大切であると再認識しました。「愛着形成が今後の成長の土台となる」というお話から、乳幼児期のかかわりが大切であると感じました。まずは、自分自身を知り、認めることで相手も受け入れることができると思いました。
- 愛着形成や子どもを権利の主体ととらえてかかわることが、子どもの将来にどのようにつながるのかを話していただき、子どもたちに「将来こうなってほしい」「こんな力をつけてほしい」など、めざす姿を思い描きながら、見通しをもった保育をしようと考えることができました。
- 子どもたちの愛着形成の大切さを、保護者にむけて発信していきたいと思いました。「子どもは自ら育っていく力をもっている」というお話を聞いて、子ども自身の意思を尊重した保育をすすめていこうと考えました。「あなたはどうしたいの？」と聞き、子どもの考えを引き出していくようにしたいです。
- 「自分を愛せるだけ人のことを愛せる」という言葉を聞き、本当にそうだと思いました。子どもたちに自分を大切に作る心を育てられるように、子どもたちの存在そのものを認めていきたいと思えます。

